

「首折れ石仏」考③—首折れ羅漢像は廃仏毀釈が主要因か—

杉浦正和

1. 初めに ～安易に廃仏毀釈を原因とできないこと～

日本寺を訪問して千五百羅漢像の多くに、頭部損壊＝首折れのあることに驚かされ、ネット上に多く存在する「観光ブログ」から、同様の首折れ石仏が各地に存在することを知った。ここから研究がスタートする。昨年「『首折れ石仏』考②」で考察した損壊理由は、①廃仏毀釈時の破壊、②俗信や迷信での持ち去り、③その他破壊行為や地震倒壊であった。真相はまだ十分に見えていないが、廃仏毀釈だけを理由にする説明が不適切であることは分かってきた。まず、昨年論文で示した事実と考察を振り返りながら、改めて事実関係を整理し直してみたい。要点は以下のようになる。

- ① 1931 年時点で、日本寺では半分ほどの羅漢像の首がないという資料がある。
- ② 安房地方には、廃仏毀釈が石仏破壊となった史実が確認できない。
- ③ 神奈川県調査で分かった道祖神像損壊は、廃仏毀釈が理由と考へにくい。
- ④ 新聞記事の地方版から、人為的破壊の事件が意外に存在することが分かる。

第一に、夏目漱石などの作品から当時の状態が推測できる。夏目は 1889 年 8 月に日本寺を訪問して漢文で『木屑録』を著し、そこで首折れ石仏を描写している。日本寺の五百羅漢に言及した徳富蘇峰など他の文人作品には、首折れの事実を述べたものがないので、これは貴重な記録と言える。ここでは、『木屑録』の関連部分を現代語訳で示す¹。

石像大なるは三尺、小なるは一尺、なかには眉目摩滅してノッペラボーなるもあり、遊客に毀損せられて頭なく手足なく胴体ばかりのものもあり。しかりといへどもそのまつたきものを見れば、お姿千変お顔は万化、一つとして同じなるものあらず、これを彫りたる工人の心をくさしを見るに足る。(施線は引用者)

1889 年時点で、首折れなどの石仏損壊の状態は、観光客が壊したと述べられ、全体の中で特に多いという表現が存在しない。夏目漱石の文章から、廃仏毀釈 20 年後の時点では損壊が進んでいたものの、「首なし羅漢」と言われる状況に至っていないと推察される。

中里介山『大菩薩峠 18 安房の国の巻』には、思う人と似た首を取って来て供養すると願い事が叶うという迷信が紹介されている²。そして、文人ではないものの、世界救世教岡田茂吉教祖が 1931 年 6 月に日本寺に泊まった翌朝、山頂で神の啓示を受けた下山の折に、石仏をテーマに以下の歌を作った³。

山間に 石の仏の数多き 仏蹟豊かな安房の日本寺
山間の 岩窟の中に石造の 羅漢の像の数多立ち居り
心なき 人の多きも立ち並ぶ 羅漢の半数首の無きかな
百体の 石造観音釈尊や 達磨の像に諸菩薩在すも(施線は引用者)

¹ 高島俊男『漱石の夏やすみ—房総紀行』朔北社、2000 年、p.329、p.32

² 中里介山が安房清澄山にいた 1916 年 7 月（松本健一『中里介山 辺境を旅するひと』風人社、1993 年、p.218）に情報を得たと想像される。

³ <http://www.rattail.org/english/gosanka/shoki.html>

岡田教祖の短歌は極めて貴重な記録であり、「半数」という具体的な割合が明示されているので、夏目訪問以来 40 年間で大きく損壊の進んだことは確実である。

第二に、安房地方に廃仏毀釈がどのように影響したのかを文献で示そう。旧『千葉県史』では、安房郡について「神職隊」を以下のように説明している⁴。

…房総では安房の神官が中心となり、神職隊を組織するという著しい活動がみられました。…隊員は武技を練り、腰越狐塚に学舎を設けて学事を研究し、明治の新政に当たって叛乱者の動きに備え、盗賊や暴民を逮捕鎮撫することを目的とするもので、明治元年(1868)…に計画されたものです。(施線は引用者)

新旧『千葉県史』で見る限り、日本寺周辺で激しい廃仏毀釈、例えば寺院の破壊などの動きが記されておらず、日本寺で廃仏毀釈による石仏破壊があったとは考えられない。

第三に、神奈川県における石仏の状況、具体的には秦野市の道祖神像が 4 割損壊している調査結果を考察した⁵。秦野市は道祖神石塔が 311 基もあり、内 181 基が男女の彫られた舟形石塔の双体道祖神で、その 68 基 38%が、またその他角柱型石塔 7 基も破損している。調査者小川直之は、舟型石仏の頭首部が自然崩壊することが考え難いことと、破損したもので建立年代の分かる 16 基の 2 基が大正・昭和期であること、廃仏毀釈で「石塔石仏も対象となったことは確か」であることから、「廃仏毀釈や神仏分離の爪痕と考えてよいのではなかろうか」と推測している。ただし、小川自身の主旨は、日本の斬首の文化と首なし石仏に関連性を探ろうとするものである。

しかし、破損の内大正・昭和建立のものが少ないのは、新しく造られたものが壊れにくいことを示し、廃仏毀釈による破壊が神官や村民の集団行動となるので、秦野市全域に広がっていた道祖神を壊して回る行動は考えられない。さらに、道祖神は厳密に言えば仏像でないこと、男女の交わりの連想から廃仏毀釈の対象とされたのが事実としても、石仏より徹底されたとは考えにくい。こうした分析から、秦野市の破損状況は、むしろ破損の原因が廃仏毀釈でないことを示唆する。また、堂宇内の地藏菩薩が破損の少ないのは、外に置かれた道祖神より雨水の影響が少なかったためとも言えそうである。

第四に、新聞記事から廃仏毀釈以外の人為的破壊や破損の記録を見いだした。廃仏毀釈が理由とされるのは、明治初めからの百数十年間で石仏を傷む程度や、悪意を持った人が石仏を壊す程度を想像できないからではないか。『朝日新聞』と『読売新聞』のデータベースやネット検索によって、石仏破壊事件の記事を探したのである。

最近十年に報道された事件でも、石仏を 6 体破損して逮捕された少年の事件や、地藏が何度も壊される事件、寺院内の石造地藏菩薩 30 体が倒された事件、地域で石仏群 14 点が倒された事件などがあつた。人間の傷害事件ではないので報道価値が高いと思えない中で、人為的な石仏破壊が意外に多いことが分かった。地方版にしか載らない小さな事件ばかりであるが、世の中には憂さ晴らしで「人」に当たり散らす乱暴者が確かに存在する。自然による劣化があり、乱暴者の蹴りや倒しで石仏は簡単に壊れるのである。

また、60-70 年代全国各地で大型開発が行われた時代に、多摩石仏の会が十年間観察してきた野仏の破損が多かったことや、開発業者が邪魔な地藏などを捨てたこと、石仏ブームなど庭の置物用に盗難が相次いだことなど、自然的な磨耗損壊以外に人為的な損壊が少

4 『千葉県史明治編』1962 年初版、1989 年三版、pp.709-710

5 小川直之「斬首の民俗—廃仏毀釈と石仏—」『歴史民俗論ノート 地藏・斬首・日記』1996 年、pp.31-38

なからずあった実態が確認できた。当の日本寺においても盗難事件が報告されている。盗難時に石仏全体でなく、一部を打ち欠いて持ち去るケースがあったとは想像できる。

すなわち、日本寺羅漢像の首折れの原因は、①の廃仏毀釈時の仏像破壊行為がなく、②俗信や迷信での持ち去りと③その他破壊行為や地震倒壊の結果であろう、というのが昨年の結論である。今年の報告では、こうした事実に基づいてさらに考察を深め、日本寺に関する文献調査を進め、諸論文から廃仏毀釈の事実をより詳しく分析してみたい。

2. 日本寺の羅漢像損壊の経緯

2. 1 日本寺の考える三つの理由

まず、日本寺が羅漢像についてどう説明しているかを、日本寺「栞」と日本寺の史料に基づいて叙述されたと考えられる『鋸南町史』から示そう。(施線は引用者)

- (1) 東海千五百羅漢 当山曹洞第九世、高雅愚伝禅師の発願により、上総桜井(現木更津市)の名工、大野甚五郎英令が安永八年(1779年)から寛政十年(1798年)に至る前後二十一年間、門弟二十七名とともに生涯をかけて千五百五十三体の石仏を刻み、太古よりの風蝕によってできた奇岩霊洞の間に安置し奉ったものです。これは実に、くらべるものがないといわれた中華民国懷安大中寺の八百羅漢をしのぐもので鋸山は世界第一の羅漢霊場として遠く海外にも知られています。海を経て伊豆から運ばれた石材に、真心をこめて彫刻された千態万状の尊像は、すべて久遠の慈容を湛える驚くべき名作です。当山の貴重な寺宝であることはもちろん、わが国の文化財としてもかけがいのないものですが、惜しくも明治維新の排仏毀釈以来荒廃したままで現在に至り、目下「羅漢様お首つなぎ」を初め、全山の復興に努力しております。
- (2) 五〇〇年間盛大を誇り輪奐の美をきわめた堂塔、伽藍も、数次の兵火のために衰微し、養和元年(1181)源頼朝、貞和元年(1345)足利尊氏らによって修復されましたが、時の流れと共に漸次荒廃し、廃仏毀釈の流弊は、当山に致命的な悲運をもたらし、全山荒廃に帰して、安置した仏像の多くが破壊されたのも、実にこの間の出来事でした。…昭和一四年一月二六日、登山者の失火…第二次大戦のぼっ発は、衆生済度の仏縁を断って全山を要塞と化し、ここに復興の気運を遅らせ…当代二一世宕嶺徳禅和尚期するところあり「羅漢の首つなぎ」を始めとして、大仏の復元(昭和四四年六月)、その他全山復興の大業を成就すべく日夜努力しています⁶。
- (3) 明治維新の廃仏毀釈(明治初年、新政府の神道国教化政策に基づいて起こった仏教廃止運動)以来、五百羅漢の頭部が破壊放棄されるようになりました。また勝負ごとに関するある種の迷信から、石仏を打ち欠いてゆくものも多く「首なし羅漢」の汚名さえ宣伝されるに至ったため、大正四年(1915)全部の復興をとげましたが、同一二年の関東大震災により、貴重な石仏にも多大の被害をうけたので、日本寺後援会の事業として、昭和三八年中に数百の羅漢像の首つなぎを行うと共に、羅漢仏像の前に鉄柵を施し保護しています⁷。

多くの人々が廃仏毀釈を主要原因として理解しているが⁸、これは人の目に最も触れる「栞」

⁶ 鋸南町史編纂委員会編『鋸南町史 通史編』鋸南町教育委員会、1995、1316p、p.593-4

⁷ 前掲書 p.600

⁸ 典型例として Wikipedia/廃仏毀釈には、「例えば千葉県鋸山には五百羅漢像があるが、全ての仏像が破壊された。現在は修復されているが、羅漢像には破壊された傷跡が残っている」とある。

が廃仏毀釈のみで説明している結果であると思われる。しかし、葉の文章をよく読むと「以来荒廃したままで」と、羅漢像頭部の破壊を明示せずに「荒廃」という微妙な表現となっている。『鋸南町史』では「第6章 宗教と信仰」内の寺院紹介で(2)の説明が冒頭の方にあり、中の五百羅漢の項で(3)の説明がある。(2)で「安置した仏像の多く」が廃仏毀釈の「間の出来事」で破壊されたと強調される。(3)では①廃仏毀釈以来の頭部破壊放棄と、②勝負事の迷信からの打ち欠き、③関東大震災の3つの理由が示されている。

子細に考えると、(2)の仏像が石仏だけでなく寺院内の木の仏像も含む可能性もある。しかし、(2)の「実にこの間の出来事」という廃仏毀釈の流弊の時期を強調した表現と比べると、「首なし羅漢」に限定した説明である(3)の、①「廃仏毀釈以来、五百羅漢の頭部が破壊放棄されるように」になったという表現は、より広い期間を意味している。また、①が頭部破壊を明示するのに、②は打ち欠きなので頭部とは限らない。いずれにしろ、3つ理由の重なった結果として首がなくなったと日本寺が認識していると考えられる。しかし私は、①の廃仏毀釈によって頭部が破壊された、という記述に根拠がないと考えている。

なお、(3)の「大正四年(1915)全部の復興」の詳細が不明であるが、『鋸南町史』に「ホ鋸山再興之碑 大正五年(1916)三月、早川儀之助撰并書、村上虎之助鐫」とある⁹。

2. 2 日本寺の荒廃の意味

ここでは、国会図書館などによって、日本寺や羅漢像について書かれた文献を探った結果を示しながら、1889年と1931年時点以外の記録について考察してゆく。

まず、『鋸南町史』に「第15章 郷土と文芸」があり、羅漢像に触れたものは少なくないものの、首なしの記述がきわめて少ない。1946年4月に「保田かもめ会が催した鋸山属目吟行の秀句、仮法堂に掲額」された17句に、羅漢を取り上げた次の三句がある¹⁰。

惜春や首なし羅漢寝ておはず	雅星
首なしの羅漢に春を惜しみつつ	正和
堂くらくおはず羅漢や蔦若葉	苔香子

少なくとも、46年時点では首なしが顕著な状態であったことが確認できる。

次に、昨年論文で資料として使った文芸作品を改めて見ると、日本寺の荒廃の様子が分かる。夏目の『木屑録』には、先に引用した部分の前に以下の記述がある¹¹。

明治二十二年八月の某日、われ友らとともにこれに登れり。谷にそうて行くこと五百歩山門にいたる。壁土はげ落ち瓦はこはれ、そのうへ遊客こぞつてわが名を書きゆくゆゑ、門扉はらくがきかさなつて読みもかなはぬ惨状を呈す。…案内者言ふ。維新の変に政府は寺院の宅地田畑を没収し、山はほぼ廢墟となれりと。

夏目の記述が、実は廃仏毀釈による荒廃を示している。後でも詳しく述べるが、廃仏毀釈には様々な要素があり、明治4年(1871)政府による寺院所有地の没収＝上知令があった。このため日本寺が資産を失って、仏閣の維持が難しくなり荒廃に追い込まれた。この上知令の影響が大きいのであるが、あまり知られていない。そして、門扉に観光客が落書きを書き、その量が多くて重なって見えなかったとある。これは、先に夏目が石仏を毀損したと述べた観光客が、たくさん訪れたこととわざわざ落書きで名を残す人が多かった。特別

⁹ 前掲『鋸南町史』p.597

¹⁰ 前掲『鋸南町史』p.1136-7

¹¹ 前掲『漱石の夏やすみ』p.31,p.32

の思い入れある参詣者であることを示唆する。この意味を後で考察したい。

上知令について、『鋸南町史』は以下のように述べる¹²。

徳川氏による御朱印寺は左の六ヶ寺でした。①日本寺、②妙本寺、④密蔵院、⑤密蔵院、⑥光明寺 明治二年(1869)六月、旧幕府管内境内を除いて社寺領の判物上知(収公)朱印状も返還させられ、同四年一月一般的に社寺領上知となりました。上知後の田畑はそれぞれの関係者へ払い下げられ、廃仏毀釈の風潮と共に関係社寺は大きな打撃を受けたのです。(施線は引用者)

朱印状で日本寺が得ていたのが15石5升なので、「大きな打撃」とまでは考えにくいですが、没収された領地がどれほどかが不明で、この通りの打撃であったと考えるしかない¹³。なお、『明治維新神佛分離史料 續編 卷上』には安房地方で示された例が三件のみで、下總香取神社におけるような打ち壊し騒動の記録がない¹⁴。

昨年論文で取り上げた、ジャーナリスト・政治家として活躍した徳富猪一郎(徳富蘇峰)が1926年6月の旅行について記した「房州二日記」に、以下のように書かれる¹⁵。

先づ鋸山の半腹なる乾坤山日本寺に詣した。…鋸山は鋸の齒の如く、海に向かつて立ってゐる。山は概ね凝灰岩か、若しくは砂岩らしく見受けた。…堂は荒れ、且つ傾いてゐる。丹色に塗りたる柱や扉は、半ば剥げてゐる。轉じて本坊に赴けば、近頃修繕したものと覚え、茅屋根は新しくある。……(施線は引用者)

徳富の記述は同じ荒廃を記述したように見えるが、夏目の時と異なる状況である。というのは、訪れた1926年が関東大震災の起こった1923年の3年後だからである。徳富は羅漢像に全く言及しなかったが、岡田教祖の短歌に示された半数の首なきがあっただろう。

鋸南町への震災の影響は死者百名であり、4つの寺院が全壊、1つが半壊したが、日本寺は入っていない。しかし、羅漢像は洞窟内に置かれていたので、地震の影響が大きかったと予想される。『鋸南町史』「保田町の状況」の中で「鋸山日本寺の五百羅漢像もまた被害甚大で、大部分てん倒破壊した」とある¹⁶。つまり、2.1(3)の説明で「関東大震災により、貴重な石仏にも多大の被害をうけた」という説明が裏付けられる。

ここでの考察をまとめると、多くの参詣者が訪れてその中で破壊が少しずつ進み、寺の荒廃によって放置されていたが、1923年の関東大震災で倒れた結果、半分ほどの首が折れた状態となったと推察できる。しかし、18世紀末に造られた石仏が百年くらいたつ中であちこちが損壊するものだろうか。

2. 3 名所紹介としての旅行記から分かる損壊の経緯

鋸山日本寺は観光名所であるので旅行記が名所紹介として出版されてきた。それらの中で首の欠けた羅漢像についての記述がないか、国会図書館デジタルコレクションで検索して探した結果、以下のようなものを見つけることができた。

(1)又石仏千余を各所岩窟に配置す。首なきあり、鼻なきあり、腕なきあり、耳なきあり、之れを修理する石工あり。落ちたる首を繼ぎ全くなきは新たに首を造りて繼ぐ

¹² 前掲『鋸南町史』p.510

¹³ 前掲『鋸南町史』p.337-8

¹⁴ p.217-220に、勝山藩薬師如来廢止と花房藩寺院境内小社合併、長尾藩廢寺がある。

¹⁵ 徳富猪一郎(徳富蘇峰)『関東探勝記』(蘇峰叢書;第7冊)民友社,1928、p.145-6

¹⁶ 前掲『鋸南町史』p.1068

羅漢首継ぎ工事はなり¹⁷。

(2)此の山へも私は幾度登ったかもしれないが、最後の二回が最も思い出が多い。…有名な五百羅漢は、大小の御仏を断崖の間におさめてあるのだが、悲しいことには何れも胴首完きものはない。何故日本人はこう破壊を好むものか、と嘆ずる旅人もあった。ある中学生は東京への土産にと、小さいのを持って帰ったなどと聞いて居る。行基菩薩が地下で嘸泣て居るだろう¹⁸。

(3)有名な羅漢様の前へ出る。首のない者、首のある者、仲良くチョコナンと端座している。この首をこっそり持ち帰り、熱を出した中学生があった、という話を思い出す。12時、山頂に行き着いた¹⁹。
(原文は旧漢字、施線は引用者)

(1)は1917年時点で、首折れ石仏の修理のために専門の石工が存在し、今の「羅漢の首つなぎ」と同じ「羅漢首継ぎ工事」のあることを記したものだ。これは2.1(3)「大正四年(1915)全部の復興」で行われた工事と思われる。羅漢像が首や鼻、腕などあちこち損壊している状況が分かる。夏目の「頭なく手足なく胴体ばかり」と対応した損壊であり、後に「首なし」と描写がほぼ一致する状況とは異なるようである。(3)は関東大震災後七年の出版物なので震災後の状態を説明したものと思われ、1930年時点では「首なし」が目立つ状態であったと考えられ、岡田教祖の「半数首の無き」とほぼ対応する。また、首を持ち帰る迷信の影響があったことを伝聞情報として確認できる。

重要なのが1919年の(2)である。1891年生の石井満にとって最初の著作の記述であり²⁰、旅行好きとして書かれたものなので1910年代の状況を示すと思われる。「何れも胴首完きものはない」と様々な損壊があり完全なものがないと言い切る。(1)の「首なきあり、鼻なきあり、腕なきあり、耳なきあり」の状態、完全なものがないという意味である。首のないものばかりという趣旨ではない。(1)の記述も含めて、造られて百年で自然的磨耗と考えにくく、石井が「何故日本人はこう破壊を好むものか」という声と中学生の小型石仏盗難を紹介するところから、人為的損壊であると見なされていたと考えられる。

注意すべきは、ここで示した戦前の記述の全てが、廃仏毀釈のような激しい破壊行動を理由として考えていないことである。これは、廃仏毀釈の史実があまり知られなかったこともあるが、損壊状況が激しい破壊行為を連想させなかったと考えるべきであろう。

2. 4 日本寺五百羅漢像損壊についての疑問と中間まとめ

明確にならないのは、石仏の打ち欠きで何かご利益があるとする迷信・俗信の影響である。ネット上の観光ブログには賭け事関連の迷信という記述がいくつかあるが、文献として確認できるのは、首を供養するという中里介山『大菩薩峠 18 安房の国の巻』の記述のみである。ただし、関連した事実として『鋸南町史』に以下のような記述がある²¹。

ばくち 幕末から明治にかけ、世相の影響を受け、ばくちが盛んに行われ、正月などはほとんど公然で女たちの嘆きの種でありました。

「勝負ごとに関するある種の迷信から、石仏を打ち欠いてゆくものが多く」あったこと

¹⁷ 鷲見剛亮『房州見物』磯谷武一郎、1917、p.208

¹⁸ 石井満『旅から旅へ』佐藤出版部、1919、p.154-5

¹⁹ 時事新報家庭部編『旅の小遣帳』正和堂書房、1930、p.208

²⁰ Wikipedia などによると、石井満は日本出版協会会長や法人精華学園理事長まで勤めた。

²¹ 前掲『鋸南町史』p.430

の背景として、博打が近隣でかなり広がっていたことは分かる。しかし、『大菩薩峠 18安房の国の巻』にある、首の供養によるご利益という迷信との関係が不明である。また、どのような打ち欠きだったのか、首や鼻、腕、耳などを迷信・俗信のためにもぎ取っていくものだったのかである。いずれにしろ、現在羅漢像の前に取り付けられている柵は、「昭和30年代に三体が盗まれたため直後に」設けられたものなので²²、石仏を自由に打ち欠ける状況が長い間続いてきたのは確かである。

もう一つ分からないのは、『木屑録』で分かるように、多くの参詣者が日本寺を訪れて落書きをした理由である。これが千五百羅漢像を造った目的と関係するのではないか。つまり、千五百羅漢造営や堂宇整備などに尽くしたのは、日本寺9世高雅愚伝師であり、「関東一円に三百万人羅漢講を設立し、日本寺の名を広く浸透させた」とされる²³。こうした三百万人羅漢講があれば、多くの参詣客が日本寺を頻りに訪れるのは当然である。しかし、伊勢参りの伊勢講が非常に有名で、御師が神宮の「伊勢暦」を各地の農民にタダで配るなどして、各地の講を組織し奉幣(寄付)を募って財政強化を図った。こうした中で18世紀にはお伊勢参りで数百万人が参詣するようになった²⁴。成田山については、成田新勝寺が18世紀から秘仏出開帳を江戸で行って、支援者をたくさん生み出したなどの情報が得られるものの²⁵、羅漢講の情報を文献で見つけることができないのである。

疑問が残ってはいるものの、損壊の経緯は以下のようにまとめることができよう。

- ・ 1779年～1798年の千五百羅漢造営などで、日本寺は再興、参詣者が多い
- ・ 1871年 社寺領上知と廃仏毀釈の風潮で打撃を受け、参詣者激減
- ・ 博打関連の迷信から石仏の打ち欠きが続き、「首なし羅漢」の汚名
- ・ 1915年 日本寺再興（「羅漢首継ぎ工事」などの修理完了か）
- ・ 1923年 関東大震災で羅漢像が大半転倒し首が損壊、半数の首なし状態
- ・ 1963年 日本寺後援会事業で「羅漢様お首つなぎ」と仏像前鉄柵設置

大震災以降は、修理の余裕がないまま軍国主義化、米軍占領となったので、修理が始まる1963年まで放置されその間も損壊が進んだ可能性がある。『朝日』記事には「石仏も明治の排仏毀釈の際に破壊されたほか、終戦時の人心がすさんだ時にも、かなり損なわれた」とある²⁶。これも俗信なのだろうか、裏付け情報がほしいものである。

3. 廃仏毀釈が与えた大きな影響と石仏破壊

3. 1 隠岐の廃仏毀釈における仏像の首落とし

日本寺への廃仏毀釈の影響に石仏への破壊行為が入っていないと考えている。この根拠を日本全体の廃仏毀釈の状況からさらに深めよう。

一昨年論文では、東白川村アーカイブス内の『東白川村の廃仏毀釈』に依拠しながら²⁷、最も排仏が激しかったと言われる苗木藩の事例を取り上げた。あえて首を折るような破壊

²² 『朝日新聞』1997年10月8日付千葉版記事：59体の石仏盗難事件

²³ 『房日新聞』2013年3月18日：[ザ・鋸山] file41 【人物編】日本寺中興の祖は本織出身
<http://www.bonichi.com/Guide/item.htm?iid=1377&TXSID=1jm8njqmji2quer0trupe7t3t3>

²⁴ お伊勢講と無尽蔵 <http://psycross.com/blog/?p=5840>

²⁵ 成田市史編さん委員会編『成田市史 中世・近世編』成田市、1986、pp685-771

²⁶ 1989年04月25日千葉版記事、「名刹日本寺復興へ 関東最古の勅願所、千葉・鋸南町の乾坤山」

²⁷ <http://www.vill.higashishirakawa.gifu.jp/archive/haibutu/>

行為の記録がなかった。打ち割るなり、引き倒すなりするのが主であろう。

阿弥陀堂、観音堂、地藏堂、薬師堂などが数多くありましたが、その多くは壊され、仏像や仏具は焼かれたり、土中に埋められたり、あるいは他領へ売り払われた。…路傍に建てられた石仏、名号塔、供養塔なども、その主なものは打ち割られたり、引き倒されたりしました。（施線は引用者）

今年、安丸良夫『神々の明治維新』によって分析しよう。地域で展開した廃仏毀釈の事例が津和野や佐渡、苗木など七つ説明され、隠岐に関して次のように述べられる²⁸。

慶応四年六月、地域権力を掌握した正義党は、全島で仏教排撃を実行し、明治二年三月以降の数か月間に、それは最高潮にたった。神道家や壮士などが先頭にたって、寺院と仏像仏具などを破壊し、家々の仏壇なども破壊された。島後には四十六か寺あったが、すべて廃滅した。神社では神社改めがおこなわれ、仏像仏具などはみなとりだして破却された。島前には、後鳥羽天皇の行在所となった源福寺があり、仏教信仰の中心となっていたが、壮士たちは、本尊大日如来の首をおとし、仏像経巻を破壊して糞尿をかけた。路傍の石仏・庚申塚なども、ことごとく破壊された。（施線は引用者）

他の廃仏毀釈の説明においても仏像の首を落とす記述が一切見当たらないので、貴重な記述である。庚申塚など道祖神のようなものも対象とされたことが分かる。ただし、他の書ではあえて首を落としたことを確認できない。例えば辻善之助は以下のように書く²⁹。

明治二年三月以後數月に亙つて、島後の四十六寺は、ことごとく廢滅に歸した。神社にある佛教の圖像器具は皆取出して破却せられた。松浦荷前・吉田倭麿等は、神社改を實行した。源福寺には本尊大日如来像を首とし、後鳥羽天皇の御手作と傳えてゐる佛像もあつた、歴代京都の諸公卿から納められた大般若經等も多かつた。壮士等は、佛像経巻を破毀し、糞尿を汚瀆するに至つた。これ等の佛像佛具等は、仁王門の前の廣地に積上げて焼棄せんとしたが、其夕大雨のため果たさなかつたので、島民夜暗に乘じ、窃にその二三體を取出し、自家の床板の下に埋没して置いたものが今日僅に残存してゐる。（原文は旧漢字、施線は引用者）

天皇の御手作なので首を別にして壊したと安丸が解釈したのか、何か情報を得たのか不明である。なお、隠岐は、明治維新を機に松江藩からの独立を図って自治をめざす隠岐騒動が起こったが、この廃仏毀釈は騒動が一旦鎮圧された後に再び権力を握った後の事件である。この時、後鳥羽天皇の行在所址にあった源福寺が破壊されたのである。その後、この区域は宮内省が管理し、村上助九郎が守部に任ぜられ、村上「邸内に私設の寶物館を建て、大切に保存して居る」とあるが、保管物のリストに大日如来像がないので破壊されたのだろう³⁰。また、苗木藩と同様に民衆が仏像を隠した事実が示されている。信仰していた仏像が壊されるのを民衆が黙って見ているはずがないのは、当然のことだろう。

木造であれ石造であれ仏像の首を折ることに特別の意味があつて、廃仏毀釈の暴力的破壊事件の中で、大量の石仏の首を折って破損させたという事実はないと断言できるだろう。

²⁸ 安丸良夫『神々の明治維新』岩波新書、1979、215p、p.91

²⁹ 辻善之助『岩波講座日本歴史 廢佛毀釋』1935、58p、pp.19-20

³⁰ 島根県編『島根県史蹟名勝天然紀念物調査報告 第5輯』島根県、1935、p.12

3. 2 廃仏毀釈が大きく変えた日本人の宗教生活

安丸の書で最も注目したいのは、廃仏毀釈という事件が日本人の宗教意識に大きな影響を与えたという指摘である。安丸の問題意識は以下のようにまとめられる³¹。

仏教や民俗信仰などに対して全国的な猛威をふるった熱狂的な排斥運動は、日本人の精神的伝統を大転換させ、日本人の精神構造を深く規定することとなった。廃滅の対象となったのは、国家によって権威づけられない神仏のすべてであった。これが狙ったのは、民衆の生活と意識の内部に国家が深く立ち入って、有用で価値的なものと無用・有害で無価値なものとの間に、深い分割線を引くことであった。このため民衆の間に鬱屈した不安や不満が蓄積されたが、それらは時間の経過の中で押し流されて社会的通念に同調化され、人々の生活様式が過剰同調型に作り変えられた。日本人の宗教意識は、実利的世俗的な生活をしている中で、初詣に神社に参詣する者が七千万人近くいて若者たちも神前結婚を行うなど、過剰同調的特質があるのである。

これは 1970 年代末の主張であって、神前結婚が今は激減して教会式結婚が 6 割となったが、初詣が依然として多く今や 9 千万人が参詣すると言われる。こうした日本人の宗教意識をどう考えるかはさておき、思想史研究者として安丸が言いたいのは、廃仏毀釈を機に日本人の宗教意識が劇的に変えられたことである。簡単に言えば、江戸時代に祖霊崇拜と仏教が深く結びついて、安定した形をなした仏教的生活様式が、明治維新以降文明開化の形をとって徹底的に破壊されたということである。廃仏毀釈は、単に寺院や仏教を排撃し天皇を中心とする国家神道を中心に据えた、というものではなかったのである。

安丸によれば、廃仏毀釈の背景にあった宗教政策の影響が以下ようになる³²。

- ①内容…民衆の宗教生活を葬儀と祖霊祭祀にほぼ一元化。その上に、産土社と国家的諸大社の信仰を置く。それ以外の宗教的信仰・習俗を圧殺した。
- ②年間行事…五節句廃止と新祝日制定と新暦への転換(明治六年一月)が行われ、国家の制定した祝祭日によって民間の習俗と行事の体系をつくり変えた。
- ③開始時期…明治五年以降、民俗信仰や民俗行事、習俗への抑圧が一般化する。
- ④啓蒙政策…伝統的宗教活動の禁止は、「産穢をきらわないとか、女人結界を廃止するとか、僧侶にも妻帯、蓄髪を許すとか」という開明・啓蒙的政策を伴い、裸体・肌ぬぎ・男女混浴・春画・刺青などの禁止とも結びついた。素人相撲、門付の芸人、万歳なども禁じられたり、改められたりした。
- ⑤政策の考え方…民俗的なものは、「全体として猥雑な旧習に属」と見られ、民俗信仰的なものが旧習の中心的要素として抑圧された。
- ⑥民衆の対応…民俗信仰への抑圧が強権的であるより、「権威づけられた啓蒙や進取のプラスの価値として人々に迫る」ものであった。民俗信仰は、文明と合理性に反する猥雑と迷信とされたので、民衆の不安・不満が生まれても、意味づけて反抗できず、「鬱屈した意識として、漠然と存在する」ほかなかった。

幕藩権力の宗教支配は、寺壇制によって民衆を特定寺院に縛りつけ、寺院を本末制度によって統制する、きわめて徹底したものであった。江戸時代に仏教が国民的に受容された

³¹ 前掲『神々の明治維新』pp.1-11

³² 前掲『神々の明治維新』p.117,p.134,p.174,pp.178-9

のは、権力によるこうした宗教支配だけでなく、次のような民衆の側の要因があった。まず、民衆の宗教が、仏教だけでなく、地域の氏神や様々な自然神、祖霊崇拜、遊歴する宗教者の活動と複雑に関わっていたこと。そして、近世前期に成立した各家の仏壇によって仏教が祖霊祭祀と深く結びついた。さらに、観音・地藏・薬師など民衆の現世利益的な願望に応える祈祷に仏教が関わった。こうして、地域の講、開帳や縁日などの仏教的なイベントを通して、民衆の様々な願望が満たされていった³³。

こうして民衆の生活に深く根をおろした宗教生活が、明治維新と廃仏毀釈の流れの中で徹底的に破壊されたのである。一般的に廃仏毀釈は、慶応4年(1868)3月13日の神仏分離の布告をきっかけに、国学に共鳴する権力者や神官たちによる仏像仏具の破壊・焼却や廃寺と理解されている。それだけでなく、明治4年(1871)の寺社上知令による経済的打撃、さらには、文明開化による民俗信仰抑圧の政策として理解すべきということである。

江戸時代の仏教は墮落した坊主が多くいて「葬式仏教」と墮したことが、廃仏毀釈の起こった背景にあると言われる。しかし、日本の宗教史を考えると、仏教がここまで民衆の日常生活を支配した時代はなかったと言えるだろう。仏教というと仏像を連想するが、その仏像は木造のものが大半である。しかし、現実に存在する仏像の数で言えば圧倒的に多いのが地藏などの石仏であり、道祖神まで含めると膨大な数となる。その大半が江戸時代に造られたのである。そして、現世利益的な祈祷と言えれば簡単であるが、例えば民衆の地藏菩薩への思いは、今から想像ができないくらいの重みを持っていたはずである。

つまり、石仏の首を折るなどということは一般民衆が決してできない、恐怖を呼び起こす行為であった。こうした宗教意識を考えると、賭け事という反社会的行為に勝つために石仏を打ち欠く、としたらそれはどんな意識を持った民衆なのだろうか。そうした観点から首折れ石仏の現象を考察する必要があるのではないだろうか。

4. カンボジアにおける廃仏毀釈事件と住民による埋納

右の写真は、インドネシアのボロブドゥール寺院のそばにある公園にあった石仏である。詳しいことは全く分からないが、こうした首折れ石仏が東南アジアに多く見られる。廃仏毀釈的な事件があまり知られていない中での現象であり、寺



院が荒廃して放置された時間も長いので、多くは自然的損壊の可能性が高いと思われる。しかし、明確に廃仏毀釈的な事件のあったことが分かる事例もある。それが、カンボジア・アンコール・ワットの保存・修復・調査をしていた上智大学調査団が、付近のバンテアイ・

³³ 前掲『神々の明治維新』pp.25-27

クデイ寺院から廃仏 274 体を発掘した事例である。発端は 2001 年 3 月境内での 103 体の発掘であった³⁴。以下のように、首や胴を壊して穴に埋められた状態であった。

仏像の大きさは大きいものでほぼ 1.8m ぐらい、小さいもので 20cm ぐらいまで、大中小があった。青銅製の小仏 2 体も見つかった。発掘状況から考察すると、深さが約 2.5m、底面一辺が約 2m の四角の穴が掘られ、底面の方に小仏や頭部など小仏が埋められていた。上の方に胴体など大型石片が投げ込まれ、そして土をかけながら突き固められたことが判明している。これらの廃仏は埋められる以前に頭部と胴体が切断されたらしく、同一固体に復元できるものは多くない。



丸井雅子によると、詳しい状況と意義が以下ようになる³⁵。(施線は引用者)

このように大量の、しかも頭部と胴部とに壊された状態で埋まっていた仏像の出土は、これまでにアンコール地域で、いやカンボジア国内で類例を聞いたことがなく、非常にまれな驚きをもって人々の注目を集めているのである。また、たしかに仏像は壊されてはいるのだが、しかし、決して粉々に砕かれたわけではなく、非常に丁寧に扱われている印象を受ける。この点も、注目すべきことである。

その後の新たな廃仏の発見もあり、石澤良昭は次のように考察する³⁶。

次にシヴァ神を篤信していたジャヤヴァルマン 8 世（在位 1243～1295 年）が即位した。新王を盛り立てるシヴァ派の勢力が反仏教運動のエネルギーとして結集し、廃仏行為に走らせたかもしれない。シヴァ派の一部の過激派が実行部隊となって国内の主な仏教寺院の仏像を打ち壊し、捨てたのではなかろうか。破壊、打ち壊し跡は全国に及んでいた。…大量の仏像破壊は 13 世紀半ば頃、ちょうどジャヤヴァルマン 8 世の治世の初期に行われたと推定される。王はシヴァ神の篤信者であった。王の命令が発せられ、過激派や同調するヨーガ行者たちにより実行された。その現場では数人の男が仏像の首部に布地もしくは草木の葉を巻きつけ、力を加えて頭部を落とし、境内にそのままさらした。現場を見た村人は仏像の破片をひろいあつめ、穴を掘って埋納していた。これは私たちがバンテアイ・クデイ寺院で発掘した結果から判明した事実である。(施線は引用者)

ここで注目したいのは仏像の扱い方である。丸井が「非常に丁寧に扱われている印象」と述べた点について、石澤は「数人の男が仏像の首部に布地もしくは草木の葉を巻きつけ、力を加えて頭部を落とし、境内にそのままさらした」と推察している。さらに、破壊された仏像は、「当時の篤信する村人たちによって懇ろに弔われて」埋納された。「約 800 年間、温度、湿度とも一定の地中にあつたため保存状況はきわめて良好で、高貴で美しい尊顔を」拝めるほどであった。まさに、苗木藩や隠岐で住民が起こした行動と全く同じように、仏

³⁴ 「アンコール・ワット付近から大量の廃仏発見- 上智大学」 <http://angkorvat.jp/doc/Discover2.pdf>

³⁵ 丸井雅子「特別寄稿 アンコールの歴史と遺跡」『旅の指さし会話帳 19 カンボジア』情報センター出版局、2001、pp.96-7

³⁶ 石澤良昭「廃仏毀釈事件をめぐる 13 世紀のアンコール王朝」 <http://angkorvat.jp/doc/tch/ang-tch1630.pdf>

教信仰の深い人々が権力に抵抗する形で仏像を救い出したのである。

石澤は「この廃仏毀釈事件はヒンドゥー教と仏教の対立という宗教的なものではなく前王憎しの一過性の事件であった」と考察する。全国に及ぶような破壊レベルを、宗教的なものでないと言えるのかに疑問があるが、石澤の意図は、破壊の仕方そのものが丁寧であったことに注目したのであろう。その意味で、神官によって行われた日本の廃仏毀釈では、隠岐のように過激な場合、焼却したり糞尿をかけたりするほど、経典仏像憎しの反仏教感情が露であった。これと比べて、カンボジアの破壊態様が異なると考えておこう。

5. 終わりに ～石仏に対する民衆の意識、日本人の宗教意識の変化～

ここで明らかになったのは、日本寺五百羅漢像損壊が、上知令による日本寺の困窮の中で関東大震災による倒壊があったこと。それ以外の有力な理由に、迷信・俗信による盗難・打ち欠きがあったことである。博打が幕末から明治にかけて広がったという背景があるにせよ、江戸時代の宗教意識からすれば石仏の盗難・打ち欠きは行い得るものでなかった。それが可能になったのは、廃仏毀釈以降の文明開化と啓蒙政策による民俗信仰抑圧の結果と考えられる。とすると、五百羅漢像建立の意図や民衆にとっての意味が問われてくる。

つまり、日本寺同様に首折れ石仏として有名なのが川越の喜多院の五百羅漢像であるが、その羅漢像は明らかに祖先供養の意図が含まれている。礎石に名前の記してあるものが多いことから分かる。日本寺にはそうした意図がない。その意味で、日本寺と喜多院では羅漢像の意味が全く異なると思われる。日本寺の三百万羅漢講の考察が不可欠である。

安丸の考察によれば、現在の日本の宗教状況、葬式の大半が仏教式に行われ、初詣に多数の人々が参詣に出かけ、クリスマスやハロウィンまで楽しむという多宗教混淆のあり様は、明治初期の廃仏毀釈以降の宗教政策に端を発するということになる。しかし、神前結婚がこの数十年の中で急速に教会式に変わったように、宗教意識の変化は大きい。ある調査によると、2009年調査で「あなたは、信仰とか信心とかを持っていますか」という質問に対して、はいと答えたのが男性26.4%、女性29.1%で、それぞれ20歳代が9.1%と14.5%、60歳以上でも38%と41.8%であった。この10年間に行われた調査では、すべて3割を切っている。1950年頃に行われた調査では60～70%であったので、多数派であった「信仰有り」が現在明らかに少数派となった。あげられる信仰は、仏教21.2%、神道5.1%、キリスト教2.0%である³⁷。この部分が大きく減るわけではないのかもしれない。

しかし、驚くべきことに葬儀が猛烈な勢いで変わっていて、密葬＝家族葬が急速に増えているようだ³⁸。「信心なし」と答える人々の微かな宗教意識が急速に変化しているのかもしれない。現在の寺院は宗教心でなくて、観光対象の意味もあって仏像や石仏を保有しているが、今後どのようになってゆくのだろうか。路傍の石仏が邪魔者扱いされるような時代となるのであろうか。そうした変化を念頭に置いて石仏のあり方を考えたい。

昨年掲げた研究課題である「石材の質や形態、気候的条件など、石仏が壊れていく化学的・物理的条件の研究」が全く進んでいない。今後は、これを含めて、さらに詳しく民衆の信仰や習俗についての情報収集と考察を深めてゆきたい。

³⁷ 研究代表者石井研士「世論調査による日本人の宗教性の調査研究 國學院大學」2011、pp.8-10、<http://www2.kokugakuin.ac.jp/ishii-rabo/data/pdf/201102.pdf>

³⁸ 石井研士「神社神道はどこへ行くのか」<http://www2.kokugakuin.ac.jp/ishii-rabo/data/pdf/200903a.pdf>